

東大寺文書

東大寺文書とは、その名が端的に示す通り、奈良の東大寺に伝来した、奈良時代から江戸時代にかけての膨大な文書群である。古代中世文書については奈良国立文化財研究所や文化庁の手によって調査整理がなされ、現在では一括して国の重要文化財に指定されている。文書群は、現状の形態によって、「東大寺成巻文書」と「東大寺未成巻文書」との2つに区別されている。成巻文書とは明治29年頃選ばれて百巻の卷子本に整理されたもので、文書の様式や差出人・内容等によって分類されている。最初選ばれたものだけあって、平安時代のものも多く、質的にも優れていて、古文書学上重要なものが含まれている。

未成巻文書の主体は、大正年間以降、京都大学（中心は荘園研究の大家であった中村直勝）によって調査整理がなされて学界に紹介されたもので、第1部荘園部（伊賀国黒田荘・美濃国大井荘等の著名な東大寺領荘園関係文書）、第2部寺法部、第3部文書部（繪旨・院宣・起請文・売券・譲状等）、第4部訴訟部、第5部造営及勧進、第6部楽人及舞人、第7～9部未整理文書、第10部未整理文書・題籤からなる。その他にも東大寺の子院である尊勝院や薬師院に伝えられた文書や、江戸時代の文書も多数存在する。重要文化財指定分だけで1万通近くになるが、その他明治の廃仏毀釈時に寺外に流出したのもも多く、近世文書を加えれば総数は2万通に及ぶともいわれるが、いまだに実数は不明である。そのうち重要文化財に指定された寺蔵文書（古代中世文書に一部近世文書が含まれる）の大半が、平成元年度の大型コレクションとして、マイクロフィルムからのCH紙焼の形で本館に架蔵されている。東大寺文書の目録としては、

小口雅史

重要文化財指定のために作成された『東大寺文書目録』（全6巻、参考図書室に配架）が刊行されており、本館でもその目録にしたがって紙焼が分類製本されている。この目録は詳細なもので編年索引も完備しており、目的の写真を見付けるのは比較的容易である。

いうまでもなく東大寺は歴史的に見て我が国最大の寺院であり、政治的にも社会・経済的にも大きな役割を果たした。とくに社会経済史の一面として荘園研究を試みようとするれば、質的にも量的にも、また最古最大の荘園領主として東大寺のそれを無視することはできない。東大寺文書の活字化としては、昭和19年から開始された、東京大学史料編纂所による『大日本古文書家わけ第十八 東大寺文書』が主なものであるが、現在に至るまで14冊刊行されたのみで半数にも達していない。しかしいうまでもなく歴史学の基本は原史料に当ることから始まる。いかに大日本古文書とはいえ誤植は有るし、花押の比較、花押位置・筆跡・署名位置等の調査には、最低でも写真が不可欠である。これらは活字情報からは得られない貴重なデータであって、文書に隠された生のデータとして、歴史研究に大きな意味を持つ。そういった意味でこの文書群は未知の大いなる可能性を秘めているといつてよい。多数の方の利用を期待している。

なお余談であるが、このコレクション購入に際しては、校費納入に慣れていた納入先が、計画段階で予め納入価格を値引いてしまったために、文部省からさらにそこからの減額を命じられ、不足分の資金調達について日本文化コース教官をはじめ関係各位にお世話になった。あらためて謝意を表したい。

（おぐち・まさし 人文学部助教授）